

子どもたちが学ぶ 「段畑復活から カンコロ飯へ」



友澤 大身
宇和島市立遊子小学校
校長

先人の熱き思いを語れる子らに

「天と地と海のはざまに生きる」これは平成元年発刊の「遊子の歴史」のサブタイトルです。遊子に赴任してすぐ手にした本でした。そこには遊子の成立から昭和63年までの生活や産業が詳しく700ページにわたって書かれていました。変貌する段畑についての記述に当時の勤勉と貧困の歴史がうかがえました。

現在の「遊子の段畑」は「新・宇和島24景」「日本農村100景」「四国水辺88ヶ所」に選定され、観光客も訪れるようになってきました。その苦労の歴史を知る人は少ないと感じました。「耕して天に至る以て勤勉なるかな。耕して天に至る以て貧なるかな。」中国の李鴻章の有名な言葉と言われています。段畑は遊子の歴史そのものです。「天と地と海のはざまに生きる」「耕して天に至る」この2つの言葉に先人たちの熱き想いと生活につながる知恵の証が伝わってきました。今だからこ

そ、遊子の地域文化や生活文化を学ばなければならぬと思いました。

段畑のすこさは、先人の苦労を感じないと分かりません。子どもたちがいつか大きくなつて、遊子を語る時、段畑を作ってきた先人の熱き思いをもとに語って欲しいと願うようになりました。

そこで、ふるさと遊子に誇りを持ち、遊子が語れる児童を目指して、「遊子を知り」「遊子に学び」「遊子に生きる」段畑を核とした教育活動に取り組むことにしました。段畑を守るう会と保護者の協力を得て、学校の裏山にある使われていない段畑の復活に六年生が総合的な学習の時間を使って挑戦することになりました。

段畑復活、地元の食文化に ふれる貴重な体験

6月、幅約8メートル、高さ5メートルの段畑で作業を始めました。石積みが崩れ、荒れた段畑から雑草とミカンの切り株を引き抜き整地が終了しました。



段畑での石積み作業

段畑でのさつまいも



段畑での整備作業

その後、約450個の石をホゴロ（ワラで編んだカゴ）を使って運び、石積み名人（地域の高齢者）から学びながら修復しました。約1ヶ月を費やした4段の段畑の復活。子どもたちにとって汗と苦勞の成果でもありました。

そして、うねを作り、サツマイモの苗を植えました。この日から収穫まで、草引きやイノシシよけを置くために段畑に上がるたびに収穫を楽しみにしていました。しかし、収穫前に防御ネットをくぐり抜けたイノシシに荒らされ、収穫は非常に貧しい状態でした。自然の厳しさと先人の偉大さを学ぶことができました。12月上旬、6年生はサツマイモを千貫切りを使って薄く切り、2週間かけて天日で乾燥させて「切り干し」を作りました。

「切り干し」を炊いたカンコ飯は段畑で生活を支えていた時代の主食でした。また、カイボシ（イワシの塩丸干し）を副食にして食事としていたそうです。

12月中旬、地域のおばあちゃんを講師に、「切り干し」を使っ



カンコ飯（ひらめし）づくり

て郷土料理であるカンコ飯（遊子ではヒラメシという）作りに挑戦しました。まず、「切り干し」を大きな鍋に入れ、浸るほど水をいれて煮込みます。やわらかくなったところでへらで押しつぶします。冷えたらまるめて完成です。カイボシとともに食し、遊子の食文化にふれることができました。「決しておいしいものではない」という子どもの感想でした。飽食の現在、家族で「食」を考える体験になりました。

命をはぐくむ海の活動へ

その後、6年生は、段畑を語る新聞を大

学生の指導で作りました。また、自分たちで調べた遊子の歴史を小冊子にまとめることができました。

このように、段畑を通した一連の体験は「遊子だからできる。遊子しかできない」。五感で感じる貴重なものです。これらの体験や活動を通して、子どもたちが、ふるさと遊子に対する見方や感じ方が変わったと感じています。

今後は、遊子の豊かな自然である「命をはぐくむ海」の活動にも取り組んでいきたいと考えています。



地元の食材カイボシ（イワシの塩丸干し）